平成 27（2015）年 9 月 25 日発刊

南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．２６

発行　南極 OB 会
会長 國分 征
編集　広報委員会

今号の主な内容

○第 56 次越冬隊からのミッドウィンターメッセージ　○平成 27 年度総会・ミッドウィンター
○第 19 回「南極の歴史」講話会
○話題：「KD604 雪上車の機械遺産に寄せて　○「ふじ」展示 30 周年の記念事業開催中
○南極関連情報　　○支部便り（新潟）
○隊次報告（28、45 次）
○お店紹介（京都、西荻窪）　○会員の広場

OB 会國分征会長ならびに南極 OB 会のみなさまへ

こちら南極昭和基地では先月末から極夜に入り、まもなく越冬の折り返し点とも言えるミッドウィンターを迎えようとしています。このたびは、ミッドウィンター祭にあたり、國分会長をはじめとする OB 会のみなさま方から、心温まるメッセージをお送りいただき、本当にありがとうございました。また、昨年、出発前には、盛大な壮行会を開催していただき、みなさまから多くの励ましとご声援をいただいたことも、改めて、この場を借りて、深く感謝いたします。

今年は越冬成立後にブリザードの襲来回数が多く、様々な作業もはかどらず大変苦労しましたが、私たち 56 次越冬隊 26 名は、全員元気に楽しく越冬生活を続けています。止まない嵐はないという言葉の通り、また、辛抱の甲斐もあってか、極夜期前から天候もだんだんと落ち着き、最近は、これまでの疲れを癒し、英気を養うためのミッドウィンター祭に向けた準備を楽しみながら進めてきたところです。

今年が南極観測の再開 50 周年にあたる記念すべき年であり、その記念すべき年に越冬できることは、私たちにとって大変光栄なことです。薄暗い極夜期の落ち込んだ気持ちを大騒ぎで紛らすことも、ミッドウィンター祭の大きな目的ではあります。しかしながら、自然や先人への感謝と祈りを示すことが本来の「祭り」の意味であることを思うと、今年のミッドウィンター祭では、人間の力をはるかに超えた南極の大いなる自然の偉大さと、その自然に抗うことなく、うまく適応しながら南極観測を推進し、発展させてこられた多くの先輩たちへの感謝の気持ちも忘れてはならないと感じています。

極夜明けからは、またさまざまな活動が始まります、今後の活動を安全で実り多いものにするためにも、引き続き、気を引き締めて、越冬後半を乗り切り、全員無事で楽しい思い出を作って、みなさまと再会できればと思っています。

本日の OB 会主催のミッドウィンター祭は、興味深い御講演が企画されており、大変盛り上がる会になることと思います、そして、その頃、暗い昭和基地でも賑やかな笑い声と美味しい食事で26名全員が盛り上がっていることを、ときどき想像していただければと思います。

これまでの皆様方の温かい声援は、私たちの大変な励みになっています。今後ともみなさま方のご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

次第に暑さが厳しくなってくることと思いますが、みなさまもどうぞお元気でお過ごし下さい。

ミッドウィンターの南極・昭和基地より
第 56 次日本南極地域観測隊越冬隊長三浦英樹ならびに越冬隊員一同

平成 27 年度南極 OB 会総会、「南極の歴史」講話会、ミッドウィンター祭の同時開催

平成 27 年 6 月 20 日（土）、南極 OB 会総会が日本大学理工学部 1 号館 2 階会議室において、午後 4 時～5 時まで開催された。また、同会場において、総会の前に、第 19 回「南極の歴史」講話会が、総会終了後に、ミッドウィンター祭が同館 2 階カフェテリアで盛大に開催され、昭和基地からのメッセージが披露された。

1．報告事項

開会の冒頭に、神田運営委員長がこれまでの 1 年間で亡くなった 14 名の方々の名前を読み上げ、冥福を祈って 1 分間の黙祷

総会の様子

を捧げた。南極 OB 会國分征会長は、あいさつのなかで、今年予定されている「南極観測再開 50 周年記念事業」の企画を進めるにあたって、この総会において重要なことを決めることになり、協力をお願いしたいと述べた。会則第 11 条に沿って、出席会員の中から神山幸吉氏を議長に選出、議事進行に入った。

（1）活動報告（神田運営委員長）

2015 年度の南極 OB 会総会を本日、6 月 20 日に、「南極の歴史」講話会とミッドウィンター祭を同時に開催した。南極 OB 会の会報を年 3 回発行した。「南極の歴史」講話会は第 16～18 回を開催した。第 56 次南極観測隊壮行会を 11 月 7 日に実施した。その他、支部との連携、南極教室事業、アーカイブ事業､南極観測再開 50 周年記念事業を進めるにあたって、運営委員会、および各委員会で検討され、活動してきた。

南極 OB 会運営委員会は広報委員会、アーカイブ委員会、南極教室委員会、企画委員会と合同で開催し､月 1 回(第 3 土曜日)で第 85～96 回を開催した。委員会ではタスクである総務、会計、広報、名簿、支部、会合、記念品等について検討してきた。運営委員会の議事録は各支部長にメールで送付した。

運営委員長より南極 OB 会の役員の変更について報告があった。副会長の小野延雄氏が亡くなられたことで、副会長はこれまでの 6 名から 5 名にすること、監事の小疇尚、大久保侃氏が健康上の都合で辞退されたことで、國分会長により大久保嘉明氏、吉村愛一郎氏が監事に指名された。

（2）各委員会報告

・広報委員会（柴田鉄治委員長）

会報 23～25 号を発行した。ホームページについては、南極の最新情報の更新、南極観測再開 50 周年記念プロジェクトのページ､「南極の歴史」講話会講演会の概要と動画の公開、および越冬隊員の現状など、観測隊が作っている HP、ブログの紹介についての報告があった。

・南極教室委員会（里見穂委員長）

南極 OB 会のホームページを通して講師派遣の希望があり、3 回の南極教室を実施した。

・アーカイブ委員会（野元堀隆委員）

南極 OB 会の会報などを通じて、アーカイブの情報収集、受け入れを行った。数件の受け入れがあった。アーカイブの案内、受入、整理、収納・管理保管に至るまでの流れについて説明があった。

・企画委員会（審議事項に記述）

・その他

2014 年度の「南極の歴史」講話会は 3 回実施された。これまでの第 1～18 回までの講師と演題が紹介された。第 18 回は 4 月 18 日、秋田支部との協力のもとで、また白瀬南極探検隊記念館開館 25 周年記念事業の一環として、秋田県にかほ市金浦勤労青少年ホームにおいて、4 名の講師で実施された。その他､「宗谷」や初代「しらせ」のボランティア、書籍「宗谷」航海記の出版・編集協力がなされた。

2．審議事項

【会計決算案】2014 年度収支決算案が田中会計担当により報告があった（資料 1）。

南極OB会　　資料1

2014年 度 収 支 決 算

2015年3月31日　　（単位：千円）

2014年3月末繰越		4,432			
収入			支出		
	予算	決算		予算	決算
2014年度通信費	2,700 (900人見込)	2,709 (873人)	会報発行関係費用	1,200	1,239
			事務室運営費	1,500	1,679
			振替え手数料		85
			交通費 (委員会等)	180	212
総会・壮行会	700	532	総会・壮行会	700	572
グッズ料金	200	120	グッズ経費	150	47
カレンダー	1,400	1,668	カレンダー経費	1,200	1,401
			慶弔関係費用	30	3
その他	0	0	予備費	40	17
小　計	5,000	5,029	小　計	5,000	5,255
			収支		▲ 226
			次年度繰越		4,206

会　計　監　査　報　告　　資料 2

南極OB会会則第8条により、2014年度会計（2014年4月1日～2015年3月31日）について、2015年6月12日に監査を実施した。

金銭出納簿及び関係書類、預金口座通帳、振替口座管理状況等について点検した結果、すべて正確に管理されていることを確認したので報告します。

2015年6月12日

南極OB会

監 事　大久保 嘉明　㊞

続いて、大久保嘉明監事により 6 月 12 日付けで会計監査の点検が実施された。すべて適正に管理されていることが確認された。審議の結果、収支決算および会計監査について承認された（資料 2)。

南極OB会　　資料3

2015年 度 収支計画

2015年6月20日　（単位：千円）

収	入	支	出
2015年度通信費（900人見込）	2,700	会報発行関係費用	1,200
		事務室運営費（家賃, 郵送料, 事務費等）	1,600
		交通費（委員会等）	220
総会・壮行会	600	総会・壮行会	600
グッズ料金	100	グッズ経費	50
カレンダー	1,600	カレンダー経費	1,300
		慶弔関係費用	30
計	5,000	計	5,000

【事業計画案】2015 年度事業計画案について運営委員長より報告があった。年 3 回の OB 会会報の発行、観測隊壮行会、総会、ミッドウィンター祭、年 3 回の「南極の歴史」講話会の開催、運営委員会他各委員会の活動推進の他に、支部事業（講演会等）の賛助、会員間連絡の強化（HP の充実等）、事務局体制の強化、南極観測再開 50 周年記念事業について提案があった。審議の結果、賛成多数で承認された。なお、50 周年記念事業の具体的案については会計収支計画案の後に審議された。

【会計収支計画案】2015 年度会計収支計画案が田中会計担当により提案があり（資料 3)、審議の結果、賛成多数で承認された。

【企画委員会の提案】「南極観測再開 50 周年記念事業計画」について

2015 年（平成 27 年）は日本南極地域観測隊の再開から 50 年を迎える。南極 OB 会は企画委員会を設置して、「南極観測再開 50 周年記念事業」の具体案を以下のように企画した。

（1）公開記念講演会

「ふじの時代」日時：平成 27 年 10 月 18 日（日）午後、場所：名古屋港「ふじ」近郊、ポートビル会議室、講演会：ふじの時代、「ふじ」見学会、交流会。

「しらせの時代」日時：平成 28 年 1 月 23 日（土)、午後、場所：初代「しらせ」船上（船橋港京葉食品コンビナート南岸壁)、講演会：しらせの時代、見学会、懇親会。

（2）記念出版事業（2016 年度出版予定)。南極観測の成果、南極大陸を拓く、写真集等（仮称）

（3）各地に展示されている雪上車、基地建物等の保存状況、利用状況等のアーカイブスリストの作成事業（支部との連携事業）

（4）記念品販売（事業計画資金に充当）

記念酒、記念品

事業経費は 200 万円：募金（会員、一般募集、一口 3000 円）および記念品販売で賄う。

審議の結果、企画委員会の事業提案が承認された。

ミッドウィンター祭で挨拶する五味貞介東海支部長

神山議長は総会のすべての報告事業、審議事項が終了したことを告げ、閉会した。総会終了後、ミッドウィンター祭が同会場、2 階のカフェテリアで開催された。

第 19 回「南極の歴史」講話会

（2015 年 6 月 20 日(土)14:30～15:50　日本大学理工学部 1 号館 2 階 121 会議室）

第 19 回「南極の歴史」講話会は、2015 年 6 月 20 日（土）14 時 30 分より、日本大学理工学部で開催された。

講演テーマと講師は以下の通りである。

・南極観測再開 50 周年「ふじの時代」　講師：國分征氏（7,13,18,32 次）

・「しらせの時代」　講師：神田啓史氏（19,24,29,37,45 次）

「ふじの時代」

國分　征（7，13，18，32 次）

1962 年 5 月日本学術会議は、IQSY (International Quiet Sun Year 静かな太陽観測年）への参加を一つの目的とし、南極観測を恒久的国家事業として再開することを勧告した。学界の一部からの根強い反対があったが、学術会議は防衛庁の協力を求め、観測船と航空輸送は防衛庁が担当することとなった。1963 年 8 月 20 日に開催された閣議により南極観測再開が決定された。

再開に当たっての基本的な方針は、定常観測として恒久的に継続実施しうる体制（気象庁などの現業官庁が担当）をとり、研究観測は広く学界に解放し高度の学術研究を行う形となった。1965 年には、①ロケットによる超高層物理観測の実施 、②南極点往復調査旅行の実施、③大陸内部の調査拠点の設置、および観測用航空機の昭和基地配備等を早期に実現を期する、とする基本方針がとりまとめられ、これを観測再開後の指針とすることが決定された。再開第 1 年度の第 7 次隊の観測概要としては、主な設営作業として、基地復元作業、発電機と通信施設等の更新、雪上車実用試験（KD601)が決まり、重点研究観測として、超高層物理部門、生物部門および海洋部門の 3 部門が取り上げられた。

「ふじ」は 65 年 12 月 31 日には定着氷に着き、当初予定より早く正月早々から作業が開始された。これは「ふじ」の砕氷能力とともに、氷状が良かったことにもよると思われる。KD601 を除くほとんどの物資は定着氷接岸地点から空輸され、その後に「ふじ」は昭和基地に接岸した。この氷状は、逆に新型雪上車（KD601)の輸送に影響を及ぼした。当初は氷上輸送が予定されていて、オメガ岬などが偵察されたが、海氷状況が輸送には適さなかったため断念、結果的には「ふじ」の昭和基地接岸後に揚陸された。

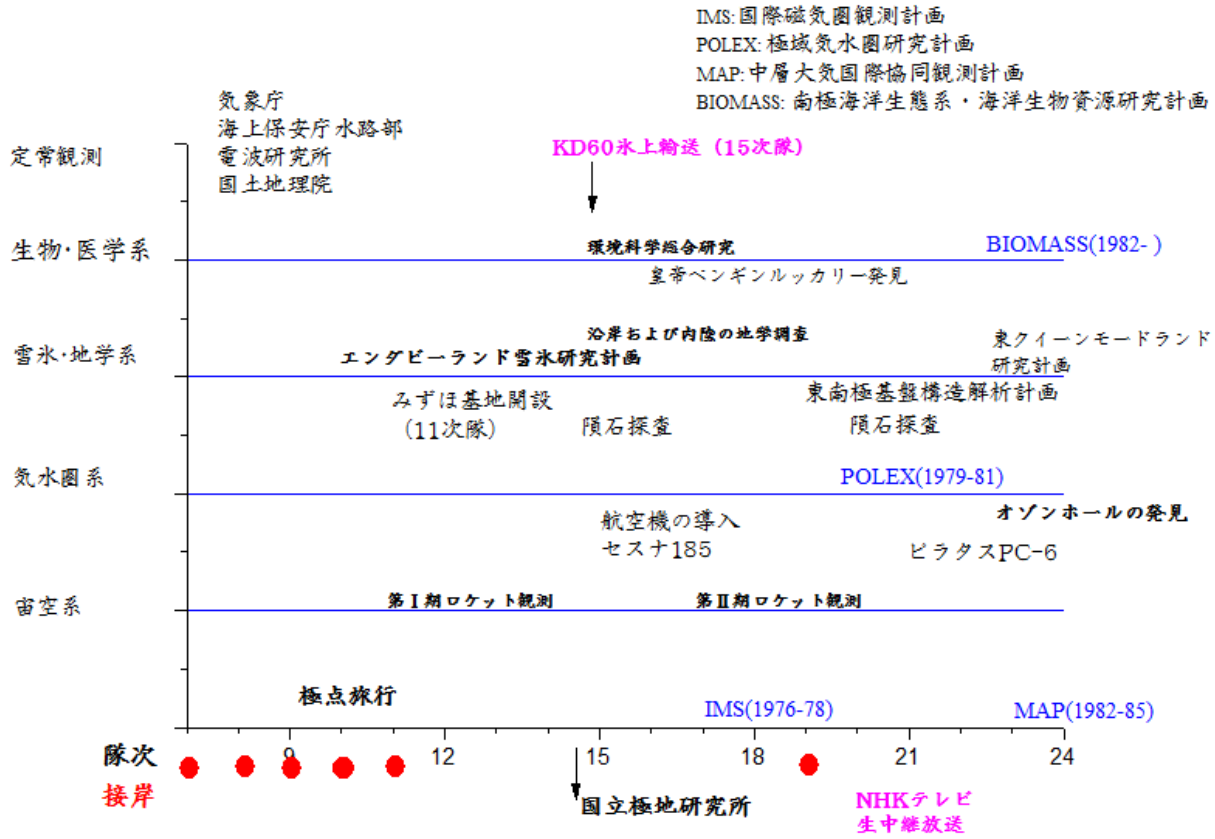
講演する 國分 征 氏

主な建物の新設は、発電棟（45kVA）飯場棟、送信棟、通信棟、電離棟、地磁気変化計室の 6 棟だったが、通信棟、電離棟と地磁気変化計室は、南極観測開始当初に準備されたが、1 次隊では基地へ持ち込めなかった建物であった。7 次隊は、6 次隊以前の観測と 8 次隊以後の本格観測との橋渡しをする段階で、8 次隊による食堂棟や観測棟の新設、雪上車や設営用車両の充実などにより、名実ともに本格観測が始まったのは、8 次隊以後とすることが妥当と思われる

11 次までは、「ふじ」は接岸し順調に輸送が行われたが、それ以後基地周辺の氷状変化により、12 次以降 19 次に基地接岸があったのみで、物資輸送は必ずしも順調に

行われなかったが、14 次隊までに極点旅行、ロケット観測、内陸基地の建設と当初の計画に従いすすめられた。残されていた大型雪上車 KD609（12 次搬入予定）は、15 次隊により約 70km の氷上輸送により昭和基地に搬入された。

18 年間にわたる「ふじ」の時代の観測経過の概要は、表にまとめたが、再開時の計画は、14 次までにはほぼ終了し、15 次から 4 つに分けられた研究分野に偏らないバランスのとれた観測が始まったと考えるのが妥当であろう。



「しらせの時代」

神田啓史（19，24，29，37，45 次）

「しらせの時代」は 1983 年、第 25 次隊が初代「しらせ」で晴海を出港してから第 50 次隊までの 26 年間、2 代目「しらせ」が第 51 次隊から 57 次隊（本年度出発）の行動までを含んでいる。本講演では観測事業の背景を中心に、「しらせの時代」を振り返ってみた。

南極地域観測統合推進本部（南極本部）は 1973 年に南極将来問題検討会議を設けた。本部委員の幾人かが南極の現地を視察、これらの報告を兼ねて、検討会議は 1976 年 3 月に、南極地域観測事業の将来計画基本方針を取りまとめた。これは国立極地研究所が 1973 年に設立されたこと、南極条約が発効後 15 年を経過したこと、南極観測

講演する 神田啓史 氏

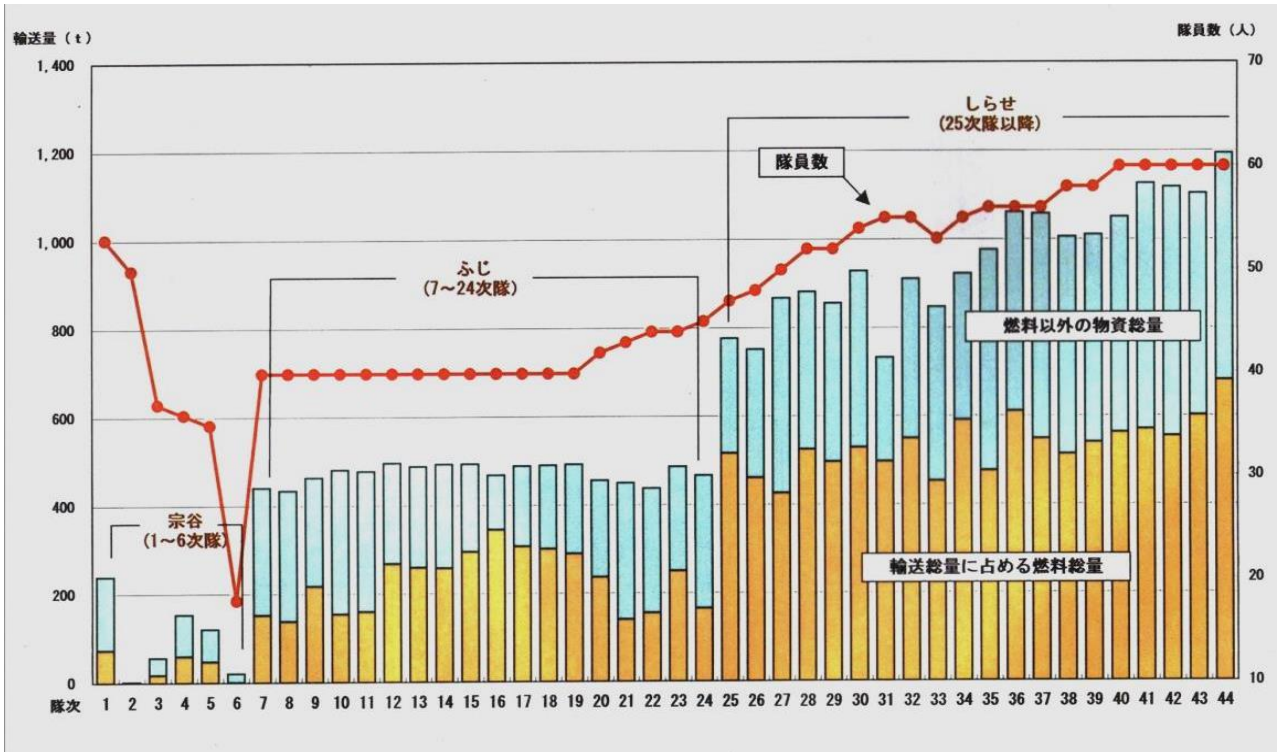


図１　輸送量・隊員数の推移

25 周年の節目であったことなどから、今後の長期的な南極観測を見越しての基本方針であった。

「ふじ」が就航してからまだ 10 年しか経っていない 1976 年には早くも新砕氷船の建造を要求する声が上がり、この基本方針にも「ふじ」の輸送力では小さすぎることが指摘されていた。輸送力の強化のために、翌年、南極輸送問題調査会議が発足した。現に、「ふじ」は 18 回の航海の中で接岸できたのは 6 回のみであった。基本方針に掲げられた観測及び設営計画の大きな特徴は、1976 年の第 18 次隊から始まった 5 ヵ年計画であった。5 年間の計画を一単位とする南極観測事業は今日まで続いており、今年出港する第 57 次隊は第Ⅷ期 6 ヵ年計画（第Ⅷ期より 6 ケ年計画となった）である。

「しらせの時代」は第Ⅱ期 5 ヵ年計画の 3 年次より、新砕氷船「しらせ」の就航から始まる。基本方針の中の輸送力の強化は、「しらせの時代」に顕著に現れた。「ふじ」の輸送力は燃料約 250t、物資量約 250t に対して、「しらせ」では燃料は約 500t に倍増し、物資量も 4～500t に増加した(図 1)。総輸送量が 1000t を超える時代になると、基地内の観測、設営計画の急速な拡大に繋がっていった。「しらせの時代」では輸送力の増大に伴って、研究プロジェクトが大型化した。成層圏を周回する大型気球実験、超伝導重力計の導入、大型短波レーダ観測、オーロラ共役点観測、氷床コア深層掘削、多目的衛星データ受信システムの導入、大型大気レーダ観測（パンジー計画）、あすか基地建設、ドームふじ基地建設、廃棄物クリーンアップ計画、コージェネ発電機システム等、新しい南極観測が急速に進んだ時代であった。また、第 27 次にはオーストラリア隊のネラダン、40 次にはオーロラ・オーストラリスの「しらせ」による救出があった。

第Ⅶ期（48～52 次）の途中で、第 49 次を最後に初代「しらせ」は退役した。しかし、後継船の建造までの道のりは遠かった。すでに第Ⅴ期の 2000 年 6 月には南極地域観測将来問題検討部会が「21 世紀に向けた活動方針」を提出していた。この方針は将来を見据えた科学の進歩や地球環境問題における南極地域の重要性を取り込んだものであった。南極本部は輸送問題調査会議を設置し、2002 年に、次世代の観測船はエコ・シップとしての実現を目指すべきという報告書を提出していた。だが、2004 年度に予算がついて、直ちに建造が開始されないと南極観測の継続は難しい状況であった。2003 年 9 月、学術会議は南極地域観測の継続と充実についての要望書を内閣

総理大臣に提出した。さらに、「南極観測の将来を考える会」の代表村山雅美氏は 11 月、南極観測の継続を訴える集いを開催した。これらの活動に追い打ちをかけるように、南極観測事業の評価があった。同月、国家的に重要な研究開発の評価が総合科学技術会議によって実施された。南極観測事業を「しらせ」が退役した後も継続するに値するかを評価することが目的であった。今日まで南極観測は外部評価が行われてこなかったことは国の事業としては適正ではない等、厳しい評価であった。結果的には後継船とヘリコプターの建造は他に代替手段がないことから適正であると判断されたものの、観測計画立案の公開性、国際的なリーダーシップの確保、成果の国際的発信、社会への説明責任が十分ではなく、改善が必要と判断された。観測を継続する国民の声も虚しく、果たして、2004 年度予算は国の財政状況から判断して、改修によって延命すべきとしてゼロ査定となった。この瞬間、「宗谷」が観測を終えた後の 3 年間の中断以来、2 度目の中断を余儀なくされた。急遽、50 次隊で越冬隊のピックアップと最低限の継続観測を実施するために、オーストラリア隊が使用している「オーロラ・オーストラリス」を代替輸送船として傭船することになった。初代「しらせ」が第 40 次隊でこの「オーロラ・オーストラリス」を氷海から救出したことがこの縁を取り持ったのかもしれない。

2008 年 5 月には新観測船以降の観測態勢のあり方を検討し、10 年先の中長期的展望とそれらをいかに実現していくかの方針が新観測船時代のビジョンとしてまとめられた。そして、2009 年 11 月、第 51 次隊が晴海埠頭を出港して、2 代目「しらせ」の処女航海となった。

話　題　KD604 雪上車の機械遺産に寄せて

KD604 雪上車の機械遺産登録の価値は、昭和基地から南極点までの往復 6000km 余りの調査旅行を達成した事であり、当時としては世界的にも偉業の成果であった。

このことは各国に雪上車による長距離観測の可能性を示唆し、今日では当たり前のようにオペレーションに組み込まれている。

KD604 雪上車の生みの親は、九次隊の村山隊長である。当時、南極で使われていた雪上車は KC 型雪上車で基地周辺と僅かな内陸調査が可能な車で、内陸深部への調査活動は不可能であった。

国立極地研究所南極・北極科学館で常設展示されている KD604（HP より）

昭和基地再開に当たって大陸深部の調査・観測の充実を図るには極点まで往復可能な雪上車の開発が切望され、この分野での研究・開発を続けていた防衛庁技術研究本部に依頼された。防衛庁では北海道を始め東北などの積雪地で装備車両として研究・開発の結果、小松製作所が製造した KC 型雪上車が使用され、この技術をベースに改良を加え KD60 型雪上車の開発を始めた。

KD60 型の誕生

KC 型雪上車を第一世代の雪上車とすると KD60 型雪上車は第二世代の雪上車と言える。1963 年、南極再開準備費に雪上車の開発が盛り込まれ開発する雪上車に要求された性能は、マイナス 40℃でも始動するエンジン、低温下でも材料強弱的な不具合が起こらない車体、そりけん引能力は約 10 トン前後で雪上車の中で調理と睡眠ができることなどを技術課題と決め、さらに、使用温度条件での構成装置の耐久性・信頼性の観点から材料の技術研究が行われた。

これらの技術課題についてエンジンの低温始動性の技術は実績のあるいすゞ自動車のエンジン部門が、車体加工と組立は雪上車実績

のある小松製作所川崎工場の製造部門が担当した。

車両の艤装装置および構成金属材料および溶接技術は観測船「ふじ」を建造した当時の日本鋼管中央研究所などが参加した。車両システム全般の研究開発とその性能確認試験全般を防衛庁技術研究本部第四研究所の車両研究部門が担当し開発が進められた。研究開発は 1963 年から 1965 年で終了し、その後、試作に移り 1966 年試作 1 号機を昭和基地に陸揚げした時点で終了した。KD60 型雪上車が機械遺産として名指しされるにふさわしい官民の技術者が終結して産声をあげた。

南極に搬入した 1 号機すなわち KD601 雪上車は、低温環境と軟雪路面の走破性および 1 両当たりのそり 10 トンのけん引能力などのテストを行い、車両の改修や改造を加え 1967 年～1974 年間で 9 両製造し、その内、南極点往復調査旅行に使用した雪上車は KD603 号機（1967 年）、KD604 号機から KD606 号機(1968 年)の 4 両が極点旅行に使われた。その詳細は南極点への道（村山 雅美著）に記載されている。しかし、その後、KD60 型雪上車の後続車両は製造されることはなく、要素技術のみが継承されたのに止まった。

KD60 型雪上車の技術は極地で使用する雪上車の進化に影響を及ぼした。調査活動、研究活動の拡大により、内陸基地（あすか基地・みずほ基地）用として、第三世代の雪上車開発が始まり SM40、SM50 型雪上車が誕生した。これらの雪上車は、その多くを KD60 型雪上車の要素技術を参考として開発された。いずれも内陸基地周辺および沿岸調査に使用され、低温性能は KD60 型雪上車ほどではなかった。

第四世代の SM100 型雪上車はドーム基地での観測を推進した渡邉興亜氏の要求に依るもので、ドーム基地への往還と調査を目的に開発された。SM100 型雪上車は様々な点でこれまでの技術から脱皮した技術を導入し、極地で使用されている中で最も低温性能および走行性能に優れた雪上車といえる。KD60 と SM100 雪上車の外観からも変化は覗える。

南極で使用した雪上車は絶えず研究開発を伴って技術継承と技術革新で推進されてきた。

しかし、研究開発が途絶えた時からその進化は衰え消えて行く。今日、雪上車の運用も外来種によるオペレーションが進んでいると聞く。機械にも顔があるように KD60 と SM100 雪上車の外観を比べて見ていると KD60 型雪上車は機械遺産にふさわしい威厳に満ち、堂々とした姿と感じるのはノスタルジヤなのだろうか。

（9 次越冬　機械担当　喜納　淳）

「ふじ」展示 30 周年の記念事業開催中

東海支部　長田和雄（27,45 次）

南極観測船「ふじ」が名古屋港にて博物館となってから、平成 27 年で 30 年になります。また、南極観測が再開されて 50 周年を迎える年でもあるということで、南極 OB 会東海支部を中心に南極 OB 会、名古屋みなと振興財団、アマチュア無線連盟愛知県支部、森田マジック教室などが力を合わせ、種々の記念事業をおこなっております。本稿では、9 月下旬までの途中経過を報告します。

まず、名古屋みなと振興財団による特別展として、「南極大陸と南極観測船ふじの航跡～「ふじ」が教えてくれたこと～」が平成 27 年 7 月 18 日から 9 月 27 日にかけて「ふじ」博物館内にて開催されています。この特別展に続いて 7 月 25 日から始まったのが「南極観測隊員・ふじ乗組員のお宝展示会」です。南極観測隊 OB やふじ乗組

平成 27 年 8 月 16 日に開催された第 1 回お宝トークの様子（赤道祭のフラガール、中尾正義さん）

員 OB から提供された「お宝」を展示し、南極観測あるいは南極での生活を身近に感じてもらおうという企画で、名古屋港ポートビル 2 階 B 会議室にて 10 月 25 日まで開催中です。土日祝日を中心に、観測隊 OB が交替でお宝の説明に立ち、見るだけではガラクタに近い品々を「お宝」にするべく解説しています。ご家族連れから熟年夫婦、女子会の皆さんに至るまで、お宝の逸話に耳を傾け、説明に目を見はり、話が弾むこともしばしばです。お宝展に関連して、南極マジック教室と南極トーク「私のお宝を語る」と言うイベントもあります。森田マジック教室の皆さんが、南極に(少しだけ)関係するマジックを披露した後に、お宝の由来を元隊員が紹介する企画です。1 回目は 8 月 16 日に開催され、「赤道祭のフラガール」と題して中尾正義（12 次・24 次）さんと、「越冬明けのおせち料理」と題して五味貞介（13 次・21 次）さんが熱弁をふるわれました。2 回目は、同窓会に集まった第 24 次隊の皆さんも加わって超満員のなか 9 月 26 日に、「第 24 次南極観測隊秘話　今だから話せるある冒険」と題して大久保栄治(24 次)さん、「タバコです。え？」と題して岩坂泰信（24 次）さん、「隊長が指名します」と題して前晋爾（20・23・24 次）さんから貴重な逸話を披露していただきました。

また、東海学園大学の社会人講座「南極観測を知る」という企画も「ふじ」30 周年記念事業の連携講座として開催されました。さらに、日本アマチュア無線連盟愛知県支部と共催で、「ふじ」の無線局（JSTY）にちなんだコールサインを用いたアマチュア無線特別局の運用もおこなっています。

今後は、お宝トークの最終回が 10 月 11 日（「私の南極物語」海老原武雄（ふじ 7 次）さん、「最後の南極犬ホセ」五味貞介（13 次・21 次）さん、「南極の野外調査」石川輝海（13 次））に開催されます。「ふじ」の乗船を懐かしむ同窓会（12 次、13・21 次、15 次）も相次いで予定されているところです。最後に、「ふじ」展示 30 周年の記念事業の締めくくりとして、「ふじの時代」：講演とパネル討論会を以下のように開催します。皆様、ふるってご来場ください。

南極のお宝展の様子。
昭和基地での調理日誌やおせち料理の展示ほか

「ふじの時代」：講演とパネル討論

日時　平成 27 年（2015 年）10 月 18 日
　　13：30～16：00
場所　名古屋港ポートビル（地下鉄、名古屋港駅下車　徒歩 4 分）
講演会（13：35～15：00）：
「村山隊長と極点旅行」
　遠藤八十一（南極 OB 会新潟支部）
「南極隕石第 1 号の発見談」
　成瀬簾二（南極 OB 会山陰支部）
「南極の食生活：国内との違い」
　五味貞介（南極 OB 会東海支部）
「南極」と「ふじ」と「名古屋」
　パネル討論会：（15：10～16：00）
司会進行：
　榊原智康（東京新聞、中日新聞　科学部）
パネラー：
　小塩哲朗（名古屋市科学館　56 次）
　児玉剛則（環境創造研究センター顧問）
　東田和弘(名古屋大学博物館 49 次)
　山中信子（愛知県教育委員会）
　ふじ見学会（パネル討論会　終了後～）
　交流会（会場：名古屋港ガーデンピア JETTY WEST 2F レッドロブスターガーデンピア店、17:30～）

交流会は、会費 3500 円です。参加ご希望の方は、以下の連絡先へ 10 月 13 日までにご一報ください。

長田和雄　Tel:　052-789－4305
　　Mail：kosada@nagoya-u.jp

南極関連情報

第 57 次隊員 30 名決定

平成 27 年 6 月 25 日（木曜日）に開催された第 146 回南極地域観測統合推進本部総会において、第 57 次南極地域観測隊員等 30 名が決定した。

なお、既に決定済みの門倉隊長、樋口副隊長を加え、第 57 次南極地域観測隊は総勢 62 名（夏隊 32 名、越冬隊 30 名）で編成される。また、夏隊同行者は最大 32 名で編成予定である。

第 56 次観測隊の昭和基地 NOW 記事一覧

昭和基地では、インターネットを通じて様々な情報発信を行っていますが、以下は会報 25 号以降の「昭和基地 NOW」の記事の一覧です。機会があれば、ご覧ください。

・オゾンゾンデ　2015 年 9 月 10 日
・当直業務　2015 年 9 月 9 日
・オーロラの映像をお届けします　2015 年 9 月 1 日
・人工衛星「れいめい」データ受信 10 周年 2015 年 8 月 24 日
・美しい自然現象と真珠母雲　2015 年 7 月 25 日
・おいしい野菜が育ちました　2015 年 7 月 15 日
・使用した水はどうしているの　2015 年 7 月 10 日
・ミッドウィンターフェスティバル　2015 年 6 月 22 日
・レスキュー訓練　2015 年 6 月 10 日
・極夜のはじまり　2015 年 6 月 3 日
・きょうは何の日？　2015 年 6 月 1 日

（松原廣司）

連載　支部便り㉕　（新潟支部）

「昭和基地とむすぶ南極教室」報告

南極OB会新潟支部は設立10周年を記念して、長岡生まれの雪上車が活躍しているロマンに満ち溢れた南極と直接に衛星通信で交信し、南極観測の魅力と宇宙をのぞく窓であり、地球を映し出す鏡である南極を紹介し、雪国である新潟県の青少年の夢と希望を育むべく、下記のようなイベント「昭和基地とむすぶ南極教室」を行ったので報告したい。

南極教室の部屋も満杯に

・日時：平成 27 年　8 月 23 日（日）／場所：長岡市シティプラザ「アオーレ長岡」／主催：南極ＯＢ会新潟支部設立 10 周年記念事業実行委員会／後援：(公社) 日本雪氷学会北信越支部、長岡市、長岡市教育委員会／協力：国立極地研究所／協賛：（株）大原鉄工所、新潟電機（株）、南極 OB 会本部

講演中の 桑原新二 氏

・「昭和基地と結ぶ南極教室」
（進行　佐藤和秀）
挨拶：小林俊一 実行委員長／講演（1）長岡の雪上車が活躍する南極観測の歩み：桑原新二 氏（（株）大原鉄工所）（2）のぞいてみよう！南極の海でくり広げられるペンギンの世界！：山本麻希 氏（長岡技大准教授）／南極教室（司会：横山宏太郎、山本麻希）／南極のふしぎ

講演中の 山本麻希 氏

（1）／南極教室：

南極と直接話してみよう（昭和基地と生中継）／南極のふしぎ
（2）「その他のイベント」
南極 DVD で南極観測を紹介／南極の氷を展示／南極観測パネル展示／南極防寒服展示／南極観測案内パンフレット配布／南極観測記念品・グッズの販売／「ペンギン」と「雪上車」のペーパークラフトの配布
・感想：昨年（2014 年）末、昭和基地との生中継計画決定、今年１月に長岡市の会場：長岡市シティプラザ「アオーレ長岡」を契約したが、４月に契約した１階の会場の変更をいわれ、日本テレビのイベント「24 時間テレビ愛は地球を救う」に譲り、南極教室は 3 階の会場に移動することになった。雪上車の展示も考えたが、ダメになった。5000 枚のチラシを印刷し、市の公共施設、道の駅、小・中・高校、コミュニティ、駅構内、テレビ・新聞・インターネットなどのメデイアに配布し、広報活動に務めた。
会場は 3 部屋を通しにし、100 人の座椅子を用意。講演が始まる頃にはほぼ満席。教室には述べ 150 人以上の参加者があった。教室前のルームでは・南極観測パネル展示・南極ＤＶＤで南極観測を紹介・南極の氷を展示・南極防寒服展示・南極観測案内パンフレット配布・南極観測記念品・グッズの販売を行い、150 人以上の参加者があった。
昭和基地からのクリアな映像が映った時は、「オーッ」と言う声があちこちから聞かれた。質問もいろいろな内容で、昭和基地の周到な用意もあって、うまくかみ合っていた。南極教室の感想は、概ね良好であった。また、展示室は小さい子やお年寄りも多く、南極の氷を触り、真剣に破裂音を聞いていた。また、このイベントのために印刷作成した「ペンギン」と「雪上車」のペーパークラフトも人気があった。機会があれば、このような企画を続けたい。南極 OB 会からの多大な援助に感謝します。
当日の模様は、翌日 8 月 24 日の「新潟日報」に掲載されました。

質問した長岡市立東北中学生の感想文です。
・映像で見た三色のオーロラがとても印象深かったです。
・南極観測は、研究者のみでは成り立たず、たくさんの方たちが支えていることがよく分かりました。
・観測隊は、長期間帰って来られないこと、生活の様子などいろいろなことを知ることができました。
・日本の南極観測隊がはじめにオゾンホールを発見したことを初めて知りました。
・南極の氷によって時代の様子がわかることに驚きました。氷のでき方についてが、とても印象に残りました。
・中継でたくさんの質問をして、答えて頂いてとても感動しました。
・南極には、ペンギン以外にもたくさんの生物が存在することが分かりました。特に氷や海の中に生物がいると思わなかったので、藻類が氷の中で生きていることがとても驚きました。
・雪上車にもたくさんの種類があることが分かりました。それを長岡の会社が造っていることがすごいと思いました。
・南極教室で、起こっている自然現象や、南極と北極との違いなど今まで知らなかった地球の不思議について分かりました。
・科学部のこれからの活動も、南極観測隊の地道な活動を続けていけば、確実に成果を上げることができると思いました。
・南極でたくさんの隕石を発見することができるということがとても驚きました。
・会場に実際の氷を触れたり、音を聞いたりなどの、体験できるところがあって分かりやすくてとても良かったです。

昭和基地と生中継の会場

・南極教室でペンギンの事を学び、もっとペンギンのことが知りたくなりました。
・ペンギンが種類によって顔が違うように、アザラシも顔が違うことを初めて知りました。
・私もいつか、北極と南極の生態について研究したいと思いました。
・講演の時に、アザラシやアシカやペンギンの映像が出てきてとても良かったです。もっと動物の映像を見たいと思いました。
・南極にもともといない生物は南極では生きていけるのかどうか知りたくなりました。

以下に、参加者からの感想メールを紹介します。

「はじめまして。今回南極教室に伺いました。新潟日報でイベントを知り、最初の講演から参加したかったのですが抜けられない用事があり、新幹線でかけつけ 3 時過ぎに到着しました。

南極隊員と生中継の後半からです。内容がすばらしかったです。映像がきれいで、おもいのほか南極からの中継がくっきり見え音声もはっきりしていたのに驚きました。オゾンホールの発見が日本人によるものというのも初めて知りました。

聴けなかった前半の分を補てんしようと、本を 4 冊とグッズを少々購入しました。安くなったのでありがたかったです。帰宅後国立極地研究所のホームページも拝見しました。せっかくの貴重な資料をもっと広めてもらいたいと思いました。

今回は南極ＯＢ 会新潟支部設立 10 周年記念で開かれたことと思いますが、これからもひんぱんに開催してほしいと願っております。」

（新潟支部幹事長　佐藤和秀）

連載「帰国後の各隊の動き」（隊次順に掲載）

第 28 次南極地域観測隊
海上保安庁羽田航空基地見学と同窓会

28 次航空担当の大本さんが定年延長で勤務している「羽田航空基地」見学を 6 月 13 日 19 名で行いました。管理課長から海上保安庁の業務紹介の後、3 班に分かれ大本さん他 2 名から、救難信号受信時の捜査や人命救助方法で固定翼とヘリの連携方法、機材投下のやり方など細かく教えていただき、操縦席に座りパイロット気分で日本の海を守ると意気込んでいました。

JR 蒲田駅前 居酒屋 飯酒盃で２４名参加

その後マッカーサーハンガー(T101 ハンガーの俗称)、ボーイング 747 ジャンボジェットのシミュレーターを見学し、穴守稲荷神社をお参りし、同窓会会場まで暑い中、電車と徒歩で移動しました。

会場では先客 6 人と合流し、生ビールを流し込んだ後に一息入れ、鮎川隊長の挨拶から始まり、遠方参加の伊禮さん、宮田さん他から近況報告をして貰いました。

来年 6 月 11 日土曜日、千葉県船橋「初代しらせ」で再開を楽しみに解散致しました。

（第 28 次昭和 機械 馬場廣明）

ヘリコプターをバックに 19 名参加

第 45 次観測隊同窓会（山岸久雄越冬隊長の退職を記念して）

群馬県榛名湖にて、45 次隊参加者の皆さん

去る 6 月 13～14 日、群馬県榛名湖温泉「ゆうすげ」で山岸久雄 45 次越冬隊長の退職記念行事が行われました。当日は夏隊、越冬隊合わせて 18 名と一部の家族が参加しました。屋外バーベキューでおなかを満たした後、コテージに会場を移し大宴会。すぐに寝てしまう者、いつまで経っても寝たがらない者、いつも通りの“昭和で見てきた光景”に懐かしく思いました。各自近況報告を兼ねた挨拶が行われた中、越冬隊が帰国してちょうど 10 年、未だに完成しないアルバム係長より一年以内にアルバムを完成させるとの宣言が出されました。完成までの具体的な数字が出されたのは今回が初めてで、これは 45 次隊にとって画期的な事です。しかしあれから 3 ヵ月、活動している気配は一切ありません。

退職記念行事に話を戻しますと、当日は有志により退職記念品として懐中時計が贈られました。懐中時計を選んだ理由としては、最新の技術を採り入れながらも、どこかレトロな雰囲気を併せ持つ観測隊にピッタリだなと思ったこと。また、このたび長年の研究者人生にピリオドを打ち、新たな人生を歩みだした山岸さんに 45 次隊の思い出と共に時を刻んで欲しいとの想いが込められています。大きな声では言えませんが、集合写真撮影時に毎回遅れてくる山岸さんに、「遅れないでね」との願いも込められています。実は、集合写真撮影時に姿が見えないのは夏訓からの話で、今回も期待を裏切りませんでした。これも 45 次隊名物の一つでもあります。

懐中時計の蓋裏には、「ワレラ ココロ トモニアリ」と刻印してあります。この言葉は、反転北上する「しらせ」から見晴台で見送る越冬隊に向けて送られた光のモールス信号です。夏隊の難波江隊員が「しらせ」乗員にお願いし、信号員が送ってくれたものです。45 次隊の活動が終了して丸 10 年、仲間と顔を合わす機会が減ってきました。しかし心のどこかで我々は繋がっています。あっ、まだ終了していない 45 次隊の公式活動がありました。頼むぞ、アルバム係！

若手新人隊員だった私から見ると、45 次隊は、ベテラン隊員達はそれぞれの力を存分に発揮し、新人隊員達は伸び伸びと活動していたと思います。結果的にそうなっただけかもしれませんが、私は山岸さんあってのことと思いますし、山岸さんの隊で越冬出来て良かったと思っています。そして、ミッドウィンターで酔いつぶれた山岸さんの頭に落書きしちゃってゴメンナサイ。

（45 次航空 増田 誠）

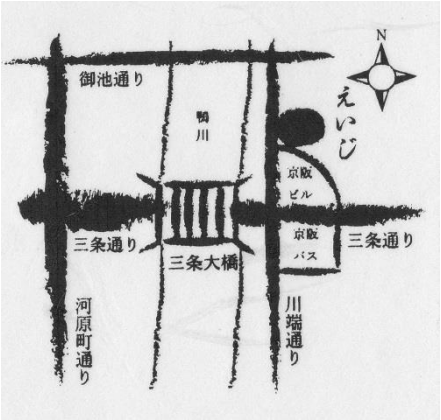
お店紹介　久しぶりにOBが開いているお店の紹介です。

饂飩・旬食酒屋「えいじ」

－南極観測隊員OB情報・京都より－

第46次および第54次南極地域観測隊で、調理として2度越冬された岸本栄二隊員が、54次隊からの帰国後、饂飩（うどん）・旬食酒屋「えいじ」を三条川端に開店されました。46次隊から帰国後も、寺町二条で同名のお店を営業されていましたが、55次隊帰国後の秋に（2014年10月）、場所を寺町二条から少し離れた三条川端に移し（京阪三条駅　京阪ビルの隣り）、再オープンの運びとなった次第です。名物は「カレーうどん」（店でぜひ食べてみて下さい）。夜は気軽に楽しめる居酒屋風です。関西に来られる機会には、ぜひぜひお立ち寄りください。のんびりと旧知の仲を温めるのにも、もってこいのお店です。下記にお店の詳細を記します。

饂飩・旬食酒屋「えいじ」
営業時間　11:30～14:00(ラストオーダー)
　　17:30～22:00(ラストオーダー)
定休日　火曜日
場所　京都市左京区川端通三条上る法林寺門前36-4
TEL 075-752-1163
備考
・名物　カレーうどん
・冬期のみ　塩ちゃんこ鍋（とりがらスープ）



（情報：第46次隊員　山崎哲秀）

西荻窪「じんから」

第55次南極観測隊、調理隊員の竪谷博さんが営む西荻窪の「じんから」にお邪魔しました。

オープンした2015年7月5日から間もない頃でしたので、内装の雰囲気や匂いはもちろん、竪谷さんの知り合いや、開店ホヤホヤのお店に興味津々なお客で満席だった様子など、何もかも新鮮な空気が漂っていました。

メニューは和食中心で、バリエーションも豊富。

もしかすると南極の塩が出てくるかも？！しれません。その日のおすすめや仕入れた旬な食材が、Facebookに

も UP されていますので、ぜひのぞいてみてください。
　きっと行きたくなりますよ！
　飲み物の取り揃えも豊富で、ワインもありました。ちなみに、提供しているワインは辛口がメインだそうです。
　フリーマントルから"しらせ"で出航する際、見送るご家族と離れる事が寂しくなり、「本気で南極行きを辞めようかと思った‥」と、話していた竪谷さん。55 次隊の壮行会でお会いした時よりも、帰国後は更にキリッとされた印象を受けました。
　大好きなご家族と営むお店が、多くの人に親しまれ続けるよう心から応援しています！

（会友　木村洋子）

おめでとうございます：叙勲、受賞

井村 茂和 氏（16 次冬）　　平成 25 年秋　瑞宝小綬章

訃報　ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
清 水　啓	31w	機械	H27.6	59	我 妻 政 利	宗谷 5,6	宗谷	H27.6	77
田之畑一男	6s	地球物理	H27.6	92	柿 沼 清 一	2・3・4・6s,9w	測地重力	H27.7	85
西 部 暢 一	5w,7s,9w	通信	H27.7	79	前小屋　端	7w	設営一般	H27.8	78

南極 OB 会アーカイブ事業報告

　南極 OB 会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極 OB 会事務局にお気軽にご相談ください。
（アーカイブ受け入れ資料）
・渡辺興亜氏資料、7 月 18 日受入、村山雅美著この道（新聞切り抜き）、色紙、家族会関連、南極新聞（29 次）、河村謙二氏所蔵日本南極予備観測隊記録、国際地球観測年などの資料（新聞切り抜き）
・北村泰一氏資料、7 月 30 日受入、書籍類 280 冊（南極、北極、探検など）、衣類 20 点（ヤッケ、手袋、羽毛服、帽子、リュックなど）、記念品等 15 点（ライター、ナイフ、メダル、福島ケルン碑レプリカなど）、写真フィルム約 1500 枚

○通信費納入のお願い
　2015 年度通信会費の未納の方には振込用紙を同封しました。確認の上、通信費の納入をお願いします。

****

南極ＯＢ会事務局　〒101-0065　東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301
電話　：03-5210-2252　　FAX　：03-5275-1635
メール　：nankyoku-ob@mbp.nifty.com
郵便振込：加入者名　南極ＯＢ会　00110-1-428672
南極ＯＢ会ホームページ　：http://www.jare.org /

****